

子育て支援プログラム「子育て親育ち・学生の心の育成」 —あそびの森の試み—

若杉雅夫・篠田美里・長谷部和子・杉山喜美恵・瀬地山葉矢

はじめに

現代の日本の社会は、様々な子育てに関する問題を抱えている。少子化・女性の社会進出にともなう社会的支援の不備・核家族化・教育問題・親の育児能力の低下・地域社会とのつながりの希薄化・複雑化する子どもの心・生活環境や社会の急激な変化など、多くの要素が子育てにマイナスの影響を及ぼしている。

このような現状の対策として、国は平成15年7月、次世代育成支援対策推進法(平成17年度から10年間の時限立法)を制定した。子育て支援業務の必要性は増すばかりである。このことを受け、本学幼児教育専攻では保育者養成に携わる責務として、又地域社会との共生を目指す短大の指名として、今社会に強く求められている子育て支援業務の一翼を担うための実施可能な支援プログラムの行動計画を作成した。

1. プログラムの概要

この子育て支援プログラムの特色は、本学の保育実習室を核として、「あそびの森」と銘打ち毎月第2、若しくは第4土曜に、未就学児の子どもとその親に遊びを提供し、遊びの支援には授業の一環として学生が参加するところにある。学生が、実践的体験を積みながら、親と子に関わる中で自然に人間的成長を遂げ、更に、地域の子育て支援にも貢献できる内容となっている。「あそびの森」の理念は、「子育て親育ち・学生の心の育成」である。親は子と遊びを共有することで、その心を深く理解することが出来る。また、子どもは親と遊びながら温かさや優しさを感じ、人やものと触れ合って遊ぶ楽しさを知り、豊かに心を耕す。更に、学生は遊びの支援を通して、実習では経験が出来ない様々な親と子の

繋がりを間近に体験する。そのことは学生の心の育成に大きな影響を与える。この試みは、学生が保育者として現場に就いたとき、子育て支援に関する業務に必ず生かされると考えている。

「子育て 親育ち・学生の心の育成」

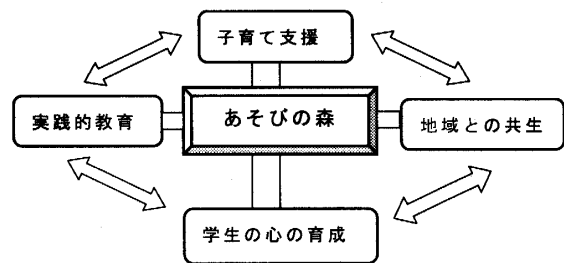


図1 「あそびの森」のコンセプト

2. 「あそびの森」の実施について

子育て支援は、保育の今日的課題として次世代育成支援の中核をなしている。本学児童教育学科では幼児教育専攻を中心に平成15年度から地域との共生をテーマとして、短期大学の理念・特性を生かした子育て支援のあり方と、いかに支援業務を学生育成に繋げるかについて試行錯誤を行い、平成16年4月、実行可能な子育て支援教育プログラム「あそびの森」を作成した。また、同時期に本学園では、今日の教育のニーズに対応した教育改革を目指し、四大と短大合同の教育プロジェクトチームを平成16年4月より立ち上げた。プロジェクトチームでは様々な改革案が立案答申され、その中で短大幼児教育専攻が作成し提案した子育て支援に関する教育プログラムが実施プロジェクトとして承認され、全学的支援の元に平成16年10月から実施する運びとなった。

平成16年度後期のプログラム実施の実績は、

10月30日(土)のオープニングイベントから始まり、平成17年3月12日(土)を締めとした7プログラムと、地元幼稚園2園が参加した特別イベント「あそびの交流」を含めた全8プログラムについて、延べ409名の参加者に遊びを提供することが出来た。

実施の準備段階として、「あそびの森」の理念と後期のプログラムを記載したA4のチラシと申込書を作成し、近隣の幼稚園・保育所・児童館・図書館などに幼児教育専攻の教員が配布した。更に、岐阜市・各務原市の子育て支援課や広報室ならびに新聞社などの協力を得、広く地域社会に広報活動を行った。

プログラムの実施にあたって、あそびの支援などに関わるボランティアの学生は、児童教育学科幼児教育専攻(1、2年276名)全員とし、実施に関わる業務を円滑に行えるように、プログラムの内容についての講義を、幼児教育専攻の特色となっている一年半に渡るゼミ(総合演習・保育ゼミⅠ・保育ゼミⅡ)の中に組み込んだ。ここで学んだ子どもや保護者に対する言葉掛けや援助のあり方を「あそびの森」で生かすことになる。そのほか実施の準備段階として、出席カードの製作や、保育実習室を遊びの場として子どもが活動しやすいようにするための危険防止の工夫や室内装飾などもゼミの学生が製

作した。更に、乳児のための託児室「おねむさんのへや」、子ども用トイレなども保育実習室に隣接して設け、遊びの間の託児や授乳などに対応できるように施設を整えた。申し込みの受付に関しては、ファックスおよび電話とし、幼児教育専攻の教員が空き時間を利用して持ち回りで対応した。しかし、教員が事務局を兼ねる点については、外部からの申し込みや問い合わせに常時応じることが職務の性格上難しく、今後の検討課題として浮かび上がった。

「あそびの森」のプログラムのテーマは各ゼミ(8ゼミ)の教員が中心となって担当し、未就学児が親と一緒に遊びを楽しめることを考慮するとともに、造形遊びやリズム遊び、運動遊びから絵本の読み語りなど多彩な内容になるように心掛けた。実施にあたっては、一つのプログラムにつき2~3ゼミで担当しているの、毎回40名ほどの学生が準備や当日の受付・案内・託児ならびに遊びの援助を行っている。遊びの援助は、原則として1組の家族に1人の学生があたるように配慮している。平成16年度後期は、各プログラムに15組~25組の家族が参加し、学生とともに遊びを楽しんだ。

また、「あそびの森」の実施状況は短期大学のホームページに毎回公開しており、本学の取り組みは広く社会に周知されている。

H 16 年度後期 「あそびの森」経過報告

第1回○新聞やぶり○手あそび

(オープニングプログラム)

参加人数 62名
 参加家族 24組(保護者26名/子ども36名)
 10月30日(土)10:30~11:30 保育実習室にて
 思いっきり気持ちを発散させて、保護者も子どもと一緒に日頃のストレスを解消。手遊びで楽しく「あそびの森」を締めくくりました。



第2回○スタンプシアター

参加人数 54名
 参加家族 21組(保護者25名/子ども29名)
 11月13日(土)10:00~12:00 保育実習室にて
 スタンプングでカタ遊び。お父さんもお母さんも子どもと一緒に虹色の手になって楽しみました。最後は、スタンプした紙から服や帽子を作って大変身。



取組の実施過程で浮かび上がった問題点は、学生指導についてと参加申込者に対する対応の2項目に分けることができる。その問題点と解決策について項目別に記述する。

1) 学生指導上の問題点

①「あそびの森」は、半期に渡り定期的に開催するため、プログラムの日程は2月、3月にも組み込まれている。すなわち、大学の休業期間中にも学生を集めなくてはならない。また、この期間は1年生にとっては後期テストが終了し、教育・保育実習が始まり、その準備もあるので時間的に余裕のない時期である。さらに、2年生は卒業試験も終わり、幼・保育所に就職が決まり研修期間に入っている者も少なくない。この状況から実施の準備や当日に参加することが出来ない学生が少数ではあるが出てきた。実施に影響は出なかったが、学生の学習機会の公平化からすると問題があるといつてよい。改善策として、平成17年度プログラムは、年間行事を綿密に検討し学生の参加に支障をきたさないように日程を組んだ。

②最近の学生は、友人間のコミュニケーションはそれなりに取ることができるが、仲間以外の人との関係を上手く築くことが出来ない者が増えている。プログラム実施の過程で、特に保護者との言葉のやり取りの弱さを感じた。改善策として、講義の段階で保護者との関わりについて、リハーサルを入念に行うことにした。

2) 参加申込者に関する問題点

①参加者の募集については、このプロジェクトが初めての試みということもあり、果たしてどれほどの親子が興味を示してくれるのか、危惧していた。しかし、実際に募集してみると、各プログラムとも予想を大きく上回る申込みがあった。このことは、現在の社会で子育て支援の場を親が強く求めている現状の現れであろう。また、プログラムの申し込み数に制限を設けなかったため、最初から全プログラムを申し込まれた方が多く、どのプログラムも定員を上回ってしまい、多くの方をお断りしなくてはならない状況になった。改善策として17年度の申し込みは、抽選で参加者を決定する方向で検討している。

②もう一つの課題は、父親の参加をいかに多く

するかである。やはり父親と母親が協力してこそ、健やかに子どもは育つ。後期実施の実績から見ると、毎回4～5人の父親と一緒に遊びを楽しんでいる。この現状を更に増やすため、母親に父親の子育て参加の必要性を語りかけているが、新年度のチラシでは、父親の参加を呼びかける言葉を特別に盛り込むことにした。

3. プログラムの特性について

①地域に密着した活動

「あそびの森」を中心とした子育て支援プログラムは、地域に密着した活動である。本学は岐阜市・各務原市との入り組んだ境に立地しており、両市唯一の私立短期大学である。このことから地域と深い繋がりをもってきた。その一つは岐阜市、各務原市の小・幼・保・児童館との交流である。児童教育学科開設以来約35年間「児童文化研究会ピノキオ」が、さらに、平成10年からは「保育総合演習」のフィールドワーク活動を通して、そして、平成14年からはさらに加えて「保育内容研究」の発表活動で地域の子どもたちとの交流を続けてきた。そして平成16年度には「あそびの森」を開き、子育て支援を目的に未就学児の親子との交流に取組始めた。

②現代の子育て支援ニーズに対応

本学の周りの岐阜市側は少子化が進み各年齢1クラスの幼稚園、小学校が増えている。しかし、わずか数百メートル先の各務原市側は、近年、次々と団地及び住宅が建ち、若い世代、核家族、他府県より入居の方が増えている。当然、子育てに関しても支援情報や場所を求められてきた。しかし、両市の境であるため、地域子育て支援活動のデットゾーンであり、子育て支援活動拠点の設置が望まれている地域でもあった。

一方で、卒業した先輩も常に保育情報や技能を求めてくる。今までは、リカレント学習講座の方で対応していたが、「あそびの森」では、より、実践的な技能や活動へのヒントを提供できる場になっている。

次に、近隣幼稚園からの要望で開いた「遊びの交流」は、少子化で少人数、一クラスで保育している園児たちを「他園との交流によってコ

コミュニケーションを図りたい」と、そのための場所と遊び、さらに、学生の人材を求められた企画であった。この新たなニーズは、学生にも、教員にも支援ニーズを考える上での参考になった。

③学生にとっての実体験の場

「あそびの森」は、幅広い年齢の子どもの親子で構成されている。同年齢で構成された幼稚園や保育所とは異なった子どもの姿と接することができる。兄弟同士や双子の母親を取り合う姿、提示された遊びに対しての、親の対応の仕方、親子の言葉がけや関わり、遊びへの参加姿勢、さらには、2時間の参加のために必要な持ち物等、幅広く、しかも切実な、今必要とする情報が求められる点で、ストレートに学生の心に届く。それらの情報を学生同士が話し合うことで、日々の学習が必然的に総合され、学生の自主的な意欲と共に理解され、次の課題の提示までもが能動的に学習されるチャンスとなっている。

④学生の自主性を育てる、

能動的な学習による保育職への意欲の高揚

この活動により、学生は、日々の学習と、実習に繋げる総合的な思考を得ることができ、実習に対して、具体的にイメージしやすく、意欲的に日々の学習にも取り組めるようになってきた。その結果、保育専門職に就職する学生が増えてきた。(図2参照)

さらに、「あそびの森」を開いた後の、保育実習訪問では、学生の意欲、視点、子どもとの関わりに関して、良い評価の言葉をいただく事が増えている。まだ、始めたばかりでデータ化はできないが、各教員が掴んだ感触である。

⑤教員の共通理解

総合演習を開設した時点から、専攻教員での共通科目ができた。そこでは、回を重ねるごとに各ゼミの共通課題を増やしていった。そのことを通して教員間の共通理解も増え、有効な取り組みを複数のゼミが共同で取り組むなど、連携が進んだ。そしてさらに、今回の「あそびの森」の活動では、子育て支援のテーマのもとより一層共通理解が進んでいる。専攻教員のチームワークのよさは本学の伝統であるが、この活

動を通してさらに、深まっていると感じている。

4. プログラムの組織性

「あそびの森」を開設するにあたり、教室(約254㎡)として使用していた部屋を改装することとした。改装するときの目標は、

- ①学生の学びの場で、将来幼児教育の現場に出たときに参考にできるような施設であること。
 - ②誰もが見て楽しめ、ホッとできる癒しの空間であること
 - ③子どもが楽しく安全に遊べる場所であること。
- という3項目について幼児教育専攻教員全員で計画を練った。以下にその詳細を述べる。

①&② 教育的かつ癒しの場

部屋のデザインにあたり参考にしたのはアメリカのサンフランシスコの幼稚園、小学校で、ゆったりした暖かい、くつろげる雰囲気のある教室にした。飾りつけは全て学生のアイデアを多く取り入れ、できる限り学生の手作りを心がけた。

幸いにして岐阜は木の生産県である。これを利用して岐阜県の子どもたちに地域の産品、産業、技術のよさを知ってもらいたいきっかけになれば幸いである。その後、県では間伐材を利用して作った遊具に対しては一定の補助金が出されることを知った。この補助金は岐阜県で遊具に適用された初めてのケースとなった。

大型遊具ロフト2基(滑り台と階段付き・階段付き)、机5基(台形)、つみき椅子10脚(同方向に並べると輪になり、交互に並べると直列になる。意匠登録出願中)、持ち運び式ジャンボ絵本台(ホワイトボード兼絵本台、意匠登録出願中)、トロッコ本棚である。

又、3～5歳児が「あそびの森」で遊びに興じている間、0歳児や1歳児が疲れて眠くなった場合や、おしめ交換、授乳などで別室が必要な場合も想定し、「おねむさんのお部屋」も用意した。この部屋は同じフロアで保育実習室の近くにあることが望ましいので、旧研究室を利用した。畳敷きに替え、その中にベビーベッド2台(中古)を設置し、ハイハイする子どもの安全のため壁は牛乳パックで作った壁面で覆った。玩具はこの部屋に用意し、それらは全て学生や

職員の子弟の使い古しを頂いた。汚れたおしめ入れのごみ箱はコピー用紙入れの箱を色紙で装飾した。4・5歳児も動きのある遊びに疲れたとき、こちらで過ごすこともある。

また、トイレを子ども用として新設するにはコストと時間がかかりすぎるので、既存のトイレに設置式の子ども用トイレ椅子を置き、手洗いは高さを下げた。トイレ内に子どもが極度に汚れたときのための簡易シャワーも用意した。

これら2部屋と子どもトイレの標識、ドア、壁面、ガラス等の装飾は全て学生の手で行った。

③ 安全性

5階であるため、窓の上下二段に鍵を取り付け、子どもが開閉をしないように配慮した。ガラスは割れないように全てポリカーボネード製とした。柱はコンクリート製であるために二面の角がとがり、子どもが頭を打つ可能性があるので牛乳パックで作製したL字型をカバーで覆ったり、段ボール紙で囲いを作り保護した。壁のコンセント穴には全てコンセントカバーをつけた。

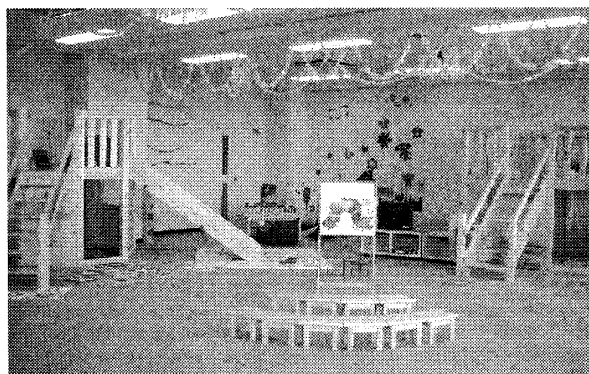
床は従来のプラスチック床を再利用したが、その上に新しく柔らかいじゅうたんを敷くことで床の硬さが緩和され、足あたりが良く、子どもが転んでも痛くなくなった。室内に市販の手洗い場を作ったが角面は柔らかいラバーで囲んだ。階下につながる階段は非常に危険であるため取り外し可能なストッパーを設置した。

プログラムの実施について、募集開始は後期・10月とした。広報は幼児教育教員全員が近隣の市町村の保育所・幼稚園等に、チラシを持ってお願いした。結果的に新聞社・近隣の自治体の広報誌で取り上げられたこともあり申込者数は予想をはるかに上回る事となった。受け付け方法は教員が講義の空き時間を考慮し、それぞれの曜日ごとに担当を決め電話番を行った。

教員と学生の担当配分は、あそびの支援・受付、各部の案内・おねむさんのおへや・ロフト危険防止担当・駐車場案内と多岐にわたり、ゼミ担当教員とその学生、更に補助教員は最低3人とした。

このプログラムは保育総合演習、保育ゼミナールⅠ・Ⅱの一環として、学生が地域の親子にいち早く触れ、子育て支援に関われるという実

践の場である。そのため、これらの講義課目は時間割を2コマ連続で組み、保育ゼミⅡは1年と一緒に講義を受け、この時に先輩から後輩に実習経験等を教えることができるというメリットもある。それについては大学内での協力も得られ、プログラムの実施に向けて幼児教育一丸となって取り組むことができた。



保育実習室「あそびの森」遊具



「おねむさんのへや」

これらを進行させるにあたり、教員間の相互理解が増し、連携が進んだ。本学科では平成3年から毎年、幼児教育充実対策協議会が定期的に開催されていた。この会合では「第一に学生が楽しめる授業を行う」「第二に社会に出た後、自ら考え、行動できる学生の育成を目指した講義をどのように進めていくか」という活発な討議が繰り返されてきた。教員全員がテーマを共有し、討論し合ううちに、保育総合演習の内容に関するアイデアも生まれた。そして、保育実習室の開設と共に「あそびの森」の企画が生まれ、それを教員と学生全員で実施し、地域との共生、子育て支援の場として学生、親子、教員が共に成長出来る場となった。

5. プログラムの有効性について

①保育者としての専門性の向上

プログラム終了後の学生のレポートには、「実習とは違い、親とも接する事ができてよかった。」という記述が多数見られた。子どもとかかわる機会を実習などで比較的多くあるのだが、親子にかかわる機会は数少ない。保育士資格を例にとってみると、保育士の法定化を契機に保育士には、子育て支援の担い手となる能力が求められるようになった。しかし、実際に短い実習の中で、子育て支援の実情を把握し、それにおける保育者の役割を学ぶことは難しい。そのような状況下で、この取組は、学生にとって、親子に触れ合える貴重な機会であり、子育て支援というもののあり方を学ぶ非常に有効な場となっている。

また、実際にプログラムの企画や進行を経験してみると、内容を決める際、対象児の年齢への配慮が必要なこと、子どもの動きを予測してけがをしないような環境構成など安全面への配慮、進行にあたってすべての参加者が楽しめるようにすることの難しさなど多くのことを学ぶことができたと書かれていた。

プログラム開催においては、企画立案、準備などを保育総合演習、保育ゼミナールという授業の中で行っているが、保育総合演習が始まった時期(平成9年度)より、専門職に就職する割合が高くなっていることからこれらの取組が保育者の専門性を向上させたということがわ

かる(図2)。

②学生の人間性の育成

事後のレポートでは、自分に自信がついた、自分の役割に対する責任を感じたなどの記述が見られた。したがってこの取組を通して、今まで以上に学生自身の自己表現の場を提供することができるようになったことで、学生の主体性や意欲を向上させることができたといえる。

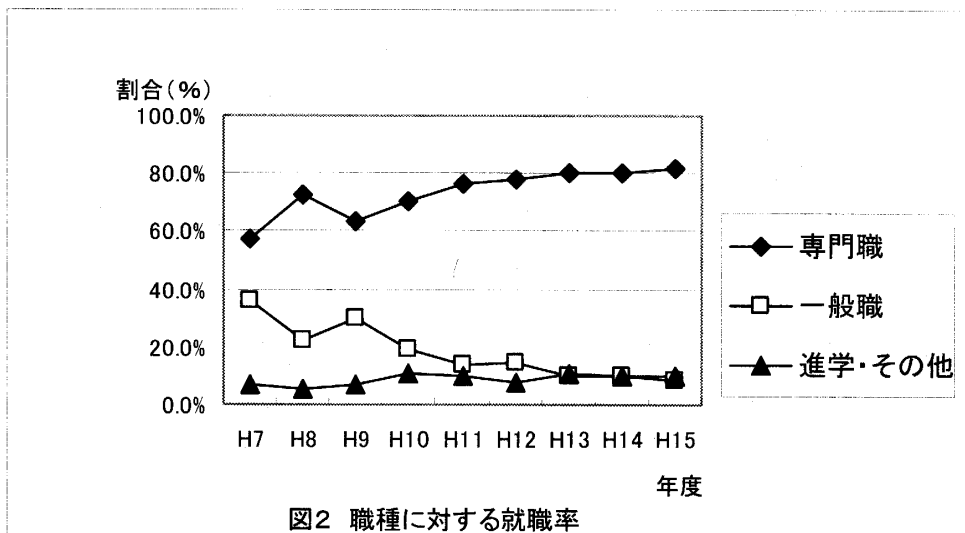
③次世代の親としての自覚の促進

今の若者は結婚して家庭を築いていくことへの意思が弱くなっているとよく言われるが、次代の親世代となる学生が実際に親子と関わることによって、子どもを生き育てることの意義、子育ての楽しさや親としてのあり方を学ぶよい機会を提供できた。

④地域への貢献

高等教育機関である短期大学として、地域の中に親子の居場所を提供し、さらに親の子育て力を高めていくという点でも有効であると考えられる。今年度は非常に多くの方からの参加希望があり、地域の親子がこのような場を必要としている現状を痛感した。また、事後の参加者へのアンケートからも同じ年齢の子どもを持つ親との情報交換ができたこと、いろいろな遊びや情報が短大側から得られたこと、子どもを遊ばせる場ができたことに対するよい評価が得られた。

すなわち、この取組は、学生という視点からみた場合、保育職としての専門性の向上、次世代の親としての人間性の育成に貢献できた。また短大という視点からみた場合、高等教育機関



として地域の子育て支援に貢献できることにこのプログラムの有効性があると考えている。

現段階では、主として学生のレポートから教育効果を測っているが、これらの教育効果をより客観的に測定するためには、エスノグラフィカルな手法を取り入れ、学生のことばがけ、動き、親や子どもとのコミュニケーションなどを丁寧に分析していく必要があると考えている。今年度のプログラム実施状況については、すでにビデオを撮ってあるので、今後、その分析を進めるとともに、来年度以降については、複数の角度でビデオを撮り、より多角的な視点での分析を可能にしていく必要があるだろう。

6. 将来展望について

1) 今後の実施計画

本学のめざす子育て支援とは、その場限りの子育てサービスの提供ではなく、地域に根ざし、地域の子育て力を高めていくための支援である。つまり我々から一方向に支援を与えるのではなく、この活動に携わる親子・学生・本学スタッフそして地域の関係機関との交流を通じて、子育て・親育ち・学生の心の育成をめざし、互いに「子育て力」を蓄えていくという循環的な支援である。そうした厚みのある子育て支援を可能にする「あそびの森」のあり方、そしてそれらの支援に貢献できる自主性と自律性をもった学生育成のあり方を今後も探っていく必要がある。

上記の課題に対する改善策として、「あそびの森」のプログラム全体をより多方面に渡り展開・充実させていくことが求められる。具体案としては、第一に、遊びそのものについてさらに検討を重ね、内容を深めていくことがあげられる。第二に、親を対象としたグループ懇話会の実施である。これは参加した親を数人から成る小グループに分け、さらにファシリテーターとして各グループに一人ずつ臨床心理士が入り、子どもの話題を中心に子育てや家族について話し合うというもので、来年度より実施の予定である。このワークでは、親がわが子について語ることにより、また参加した他の親たちの子育てへの

思いや経験に触れることにより、自身の子育てや子どもへの関わりを客観的に見つめ直す機会を提供することをねらいとしている。さらに参加者それぞれの語りを通じ、親同士の交流を図ることは、親自らの育ちゆく力を喚起していくことにもつながるであろう。第三として、学生と子どもとのかかわり合いについて、ビデオ映像を通じた分析を行うことにより、学生がより子どもの心に添った援助方法を学ぶ場としていきたい。第四として、今後、本学の食物栄養学科と共同して、親子向けの食事のサービスや食に関するアイデア提供など、食の面からも子育てをサポートしていく新たなプログラムも計画している。

2) 将来の展望

さらに、上記のプログラムの他にも、学外の関係機関との連携、子育てに関するネットワークづくりやあらゆる情報提供など、地域の子育て支援のコーディネートも行っていきたいと考えている。長期的には、「あそびの森」を通じて子育て支援を学んだ学生たちが、保育者として社会に出ていくことにより、支援の活動がその先々の家族との間で循環的に生じていくことになるであろう。「あそびの森」の取り組みを通して、そうしたサイクルを幾重にも形成し、ネットワークを充実させていくことは、次世代育成支援にもつながる子育て力を育んでいくものと考えている。

— 児童教育学科 幼児教育専攻 —

資料 1. H 16 年度後期「あそびの森」プログラム

2004 年度 (10. 11. 12. 1. 2. 3 月) あそびの森プログラム

開催 日・時	あそび	どんなあそび	備考
10 月 30 日 (土) 午前 10:30 ~ 11:30 オープニング	○ 新聞やぶり ○ 手あそび	新聞をちぎったりやぶったりして気持ちを解放しよう。 アンパンマンの手遊びをしよう。	
11 月 13 日 (土) 午前 10:00 ~ 12:00	スタンプシアター	色々なものをどんどんスタンプしてみよう。スタンプしたかたちからお話ができるよ。	よごれてもよい服
12 月 11 日 (土) 午前 10:00 ~ 12:00	クリスマス会	歌・ゲーム・お話など学生のおねえさんと一緒に一足早いクリスマスを楽しんでみませんか?	
1 月 22 日 (土) 午前 10:00 ~ 12:00	森のおんがく家	森の動物に変身しよう。 楽器を作って演奏してみよう。	
2 月 12 日 (土) 午前 10:00 ~ 12:00	親子で作る ペーパークラフト	インターネットから取り出した紙のオモチャ等を親子で作ってみませんか。	のり・はさみ持参
2 月 26 日 (土) 午前 10:00 ~ 12:00	○ 紙芝居 ○ うちわでサーキット	いろいろな楽しい紙芝居があるよ。 お話が終わった後は、親子で思いっきり“うちわ”を使って紙風船を飛ばしましょう。	
3 月 12 日 (土) 午前 10:00 ~ 12:00	音楽絵本	歌って、作って遊ぼう。 日本語・英語の歌も入れて遊びましょう。	

資料 2. H 16 年度後期「あそびの森」参加人数

あそびの森／あそびの交流 参加人数

あそびの森実施日	大人	子ども
10 月 30 日	24	35
11 月 13 日	21	28
12 月 11 日	20	31
17 年 1 月 22 日	26	37
2 月 12 日	17	32
2 月 26 日	18	25
3 月 12 日	20	30
小計 (のべ人数)	146	213

あそびの交流	保育者	子ども
3 月 1 日	6	44

参加者数 (のべ人数)	大人	子ども	参加者 総計 409 人
	152	257	

指導教員数	参加学生数
のべ 32 名	のべ 300 名